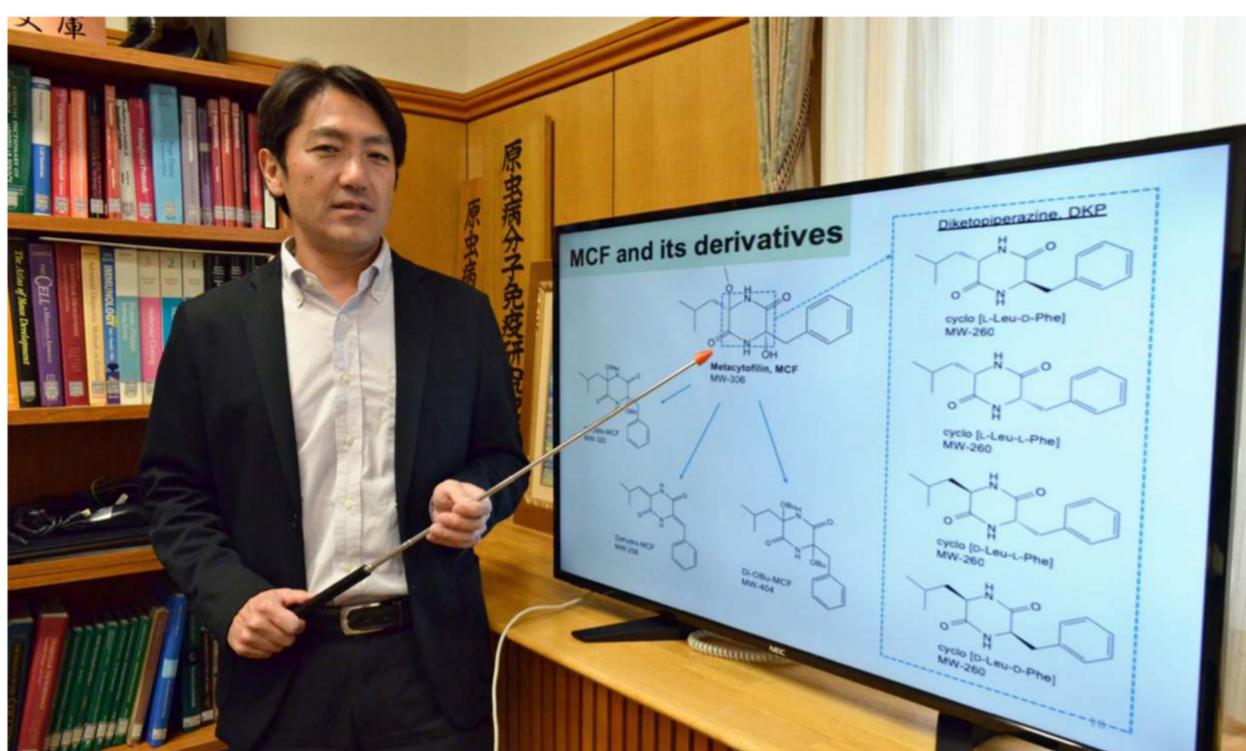


感染症「トキソプラズマ」



トキソプラズマの治療薬候補となる化合物を発見した西川教授

トキソプラズマ症 猫のふん便や感染動物の食肉に含まれるトキソプラズマ原虫の経口摂取で起きる人獣共通感染症。健康な人が感染しても重篤化しないが、妊娠中に初感染すると脳症など胎児への先天性感染症を引き起こす。エイズなど免疫が低下している人は死亡する場合もある。

トキソプラズマは世界人口の3割が感染しているとされ、特に妊婦が感染すると流産や胎児の発育に影響が出る。現在市販される治療薬は白血球減少や嘔吐(おうと)などの副作用が強いことから、より安全な薬剤化合物を発見するため、微生物化学研究所と共に研究に取り組んだ。

2000種類以上の候補を調べ、カビの一種から見つかった化合物「MCF」に着目。トキソプラズマに感染させたマウスで実験すると、市販薬よりも少量の投与で高い治療効果が得られた。妊娠したマウスに投与しても妊娠率や生まれた子どもの発育に問題はない、目立った副作用は確認されなかった。

帯広畜産大学の西川義文教授(46)らの研究グループは、感染症「トキソプラズマ」の治療薬候補となる有望な化合物を見た。これまでの治療薬より効果が高く、副作用の危険性が少ない。西川教授は「企業と協力し、治療薬の開発・販売になげたい」と話す。

西川 教授 帯広畜大 妊婦への使用期待

新治療薬へ有望物質

変化せず、原虫だけを効果的に殺すことが分かった。これらのことから、副作用を心配せず、妊婦にも使用できると期待されている。原虫病は世界で多くの人が感染しているが、市場規模が小さいため治療薬開発への製薬会社の関心は低く、研究機関が推進する必要があるという。西川教授は、研究成果を生かして企業との協力で治療薬の実用化を目指すほか、トキソプラズマ感染による家畜の繁殖障害を防ぐためのワクチン開発にも取り組む。

研究成果は米国の科学雑誌「The Journal of Infectious Diseases」に掲載された。(池谷智仁)